
メイドロボのいる世界

四季式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドロボのいる世界

【ZPDF】

Z9810Z

【作者名】

四季式

【あらすじ】

主人公がToHeart2の河野貴明に転生（憑依？）します。

0-1話 テンプレ

突然だが、僕には特殊能力がある。

……あの、可哀想なものを見る日はやめてください。

「中一病乙www」とか言うのやめてください…?

えーと、どんな能力かと『うと、『相應の代償を払えば願いが叶う能力』だ。

そこ、地味とか言つな。

この能力、代償が大きければ所謂『奇跡』すら起こすこともできる。代わりに代償も莫大なものになるけど。

まあ、そんなこんなで二十歳くらいまで適当に生きてきたんだが、普段はテストの出題を当てたり、丁度いい電車に乗れたりなどに使つていい。

今では代償をある程度なら自分で誘導することができるし、願いに応じた代償がどれくらいかもなんとなく分かるようになった。

そんなある日。

大学へのいつもの通学路の横断歩道で信号が変わることを待つていると、小学生が待ちきれずに道の途中から渡ろうとしていた。

危ないな、と思った直後、その小学生に猛スピードで突っ込んで

くる一台のトラックが見えた。

自然と体が動いた。

(間に合えー)

小学生を歩道側に思いつきり引つ張り、その反動で僕は対向車線に転がつて行つた。

すぐ後ろをトラックが走り抜けたのを感じ、なんとか2人とも助かつたことに安堵した。

が、

僕はあの小学生が助かるのを『願つて』しまつていてことを失念していた。

『願い』には『代償』が必要だ。

左側から感じるHンジン音と振動。

僕は尻もちをついていてすぐには動けない。

なるほど、僕はこうやって死ぬのか。

首だけ後ろを向くと、躊躇そうになつたせいか、泣きじゃくつ
ている小学生が見えた。

どうやら大きな怪我はないようだ。

まあ、良かつたかな？

次の瞬間、雷が落ちたかのよつた衝撃が全身を襲つた。

体の感覚がなくなり、意識が薄くなつていいく中で、僕は、死にた
くないな、と『願つた』。

〇二話 輸生？憑依？

「うああうえうおうあ…」

（知らない天井だ…）

テンプレのセツツを嘗めうとしたが、上手く発音できなかつた。体を起しりうと思つて、ふと手を見ると、小窓こまこまとした手があつた。

レギモレギモ。

手を動かしてみると、皿の前のふに手もその通りに動く。

（……）

おおう。

うつせり転生したようだ。

いや、こじの場合憑依かな？

うう、そんなことはどうでもいい。

うつせりになつたんだが。

原因は……やっぱり僕の能力なんだりうなあ。

願いは『死にたくない』。

代償は『前の体』と『今の体の本来の意識』といったところか。

肉体の死はあの時点では回避不可だったのと、意識だけ他の体に移ったのだろう。

（…………この子とこの子の両親には悪いことをしたな…………まあ、そんな悔やんでも何も始まらないんで、新しい人生を楽しむとしますか）

人生、楽しんだ者勝ちです。

さて、まずは『能力』の確認だ。

無いなら無いでいいのだが、有るなら注意して使わないといけない。

また死ぬのは御免だからな。

ふむ、願いは『親が宝クジで10万円が当たる』でいいかな。

3億とかあんまり欲張り過ぎると、代償もどんでもないことになるから。

これなら、まだ取り返しのつく病気や怪我くらいに取まるからどう

うにかかるだろ。

「ん? どうしたの、貴明ちやん?」

母上が登場。

「うん、言ひちゃ悪いが……普通だ。

髪型も顔の造形も普通としか言ことひがないほどの普通だ。

「お腹すいたのかなあ? 今準備してくるからね」

やう言ひて母親は部屋を出て行つた。

ミルクを取りに行つたのだらう。

どうやら僕の新しき名前は『貴明』とこひしき。

これまた普通の名前だな。

ま、外国人とかじやなかつただけマシかな。

取り合えず今懸念すべきことは、能力の確認と……排泄だな……。

オムツとか、羞恥プレイにも程があるだ。

「ふわあ……」

そんなことを考へていろと急に眠くなつてきた。

精神は二十歳でも肉体は乳幼児。

僕は睡魔に抗えず、そのまま眠りについた。

そんな感じで暗黒（羞恥）の2年を過ごした僕は、3歳になった。思い出したくない思い出ばかりだけど、この2年で分かったことがいくつかあった。

一つ目は能力について。

調べた結果、これは以前と全く変わりなかった。

2年前、父親——こっちも普通な感じだった——が買った宝クジで10万円当たり、その後、僕が1週間ほど風邪をひいた。

他にもいろいろ試したが、代償の恣意的な操作もできだし、程度も相応だった。

といつことで、当初の計画通り無茶な願いは意識的に抑えるようにすることにした。

一つ目はこの転生？先について。

どうやら僕、僕が前にいた世界とは別の所らしい。

国は日本だし、言葉や文化も同じなので初めはわからなかつたけど、決定的な証拠があつた。

メイドロボである。

僕のいた世界では、やつと部分的に人間に似た形に作るくらいしかできなかつたが、この世界には人工知能搭載で、動きや見た目も人間にそつくりのロボットがある。

それがメイドロボーラー業界最大手の来栖川エレクトロニクスが誇るHMXシリーズである。

この時点でのこの有名なギャルゲー『ToHeart』の世界、またはそれによく似た世界であることが分かつたが、更に重大なことが判明した。

僕が河野貴明、つまり『ToHeart2』の主人公なのだ。

名前に続いて苗字が河野と分かつた時はただの同姓同名かとも思つたが、隣の家の表札に『柚原』と書かれているのを見て確信した。あ、春夏さんはたいへん綺麗でした。

「そしてここには柚原家のリビング。僕はお母さんにお呼ばれしています」

「だれにゆつてるの？ タカくん」

2歳のこのみちゃんにつつこまれました。

春夏さんは現在キッチンで調理中。その間、このみちゃんの相手を仰せつかつてゐる。

「さて、このみちゃん。何して遊ぶ？」

「んーと、んーと、おおおーるー。」

「はこせー。んじゅ僕はお父さん役?」

「うー。タカくんがねどりあんど、じのみがおかあせー」

「じの歳（精神年齢）でおまめー」と少し恥ずかしげが、じのみちゃんの楽しそうな笑顔を見るとあこいかと思ひ。

「じゃあ、タカくんがいえにかえりてくねといひからね」

「あーよ。えーと、ただいまー」

「あなたー！ やこせんかえりがおそいわよー。こつたいなにしてるのー。」

「え？ ええと……」

「もしかしていわき？ わたしよりわかこーむづきうなんじゅなじのー？」

「はあー。」

「え、これなんでリアルおまめー」とへ。

「いこわけはああたくないわー。じつかにかえりせてもうこまかー。」

「……」

「あれ？ じのあとせーかーだよ。もひくぐれみのたんじゅいわー

だから、プレゼントをかうためにがんばってじーじをしつこねのやつていうんだよ、タカくん」

「…………」みちやん、じれってもしかして春夏さんとおじさんのまね？」

「うん。おかあさんたちが私のことはなしてたの」

春夏さん…………ナビものこるとじーじで何話してるんですか。

「あらあら、タカ君に遊んでもらつてたの？」

出来上がった料理を持つて春夏さんがやつてきただ。

「あ、おかあさんー、『じはんなあ』？」

「ふふ、今日は…………じゃーんー、ふわとろオムライスよーーー」

「わーーー、オムライスだーーー。」

両手をあげて喜ぶみちやん。

「元気だねえ。」

「あら？ タカ君、オムライス嫌いだった？」

春夏さんは僕が大して反応しなかったのを見て心配やつて見てくる。

「いえいえ、大好きですよ。特に春夏さんが作ったものはすばしくお

いしいですか？』

オムライスに限らず、春夏さんが作る料理はそこら辺の料理人顔負けの「うまさ」だ。

ちなみに、我が母は下手ではないが、まあ人並み程度の腕前で、たまに春夏さんに教えてもらっている。

「あら～嬉しい」と言つてくれるわねえ。おだててもオムライスしか出ないわよ～』

『『『笑顔の春夏さんに対し、このみちゃんは頬を膨らませて見るからに不機嫌そうにしている。

え？ 僕何かしました？

「おかあさんばっかりタカくんにほめられてずるー。」

ああそりこひこと。

春夏さんは『あらあら～』みたいな顔でいつも見てくるだけ何も言わない。

あ、僕にどうにかしようと。

『えー、そうだな。このみちゃんが大きくなつておいしい料理が作れるようになつたら、いつぱい褒めてあげるよ』

『うん！ がんばつておつよいつおぼえやー。』

あと何年後になるかは分からぬけど楽しみにしておこう。

オムライスはたいへん美味でした。

公園デビューというものがいる。

簡単に言えば初めて近くの公園[にいく]といふのである。

しかし侮る事なれ、この成否によってこれから幼少期の生活が決まると言つても過言ではない。

もし幼児たちの輪にうまく入れなかつたら、次からは公園に入る
ことすら難しくなるだろう。

さらに、これから通うであろう幼稚園ないし保育園でも公園グループで集まることが予想される。

あるじどうだらう、まことに出来上かりである。

「なにあの子、ひじりきちでめりあせ暗いんですねー」みたいに思われてしまつ。

そんな「」と「」ならないため「」も公園マーケティングは必ず成功させなければならぬマーケティングである。

まあつまり何が言いたいかといえば……。

「このみあせん、心の準備はできた?」

「レバーハンドル」

いのなかやんの公園デビューなのである。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。僕の友達もいるしさ」

ちなみに僕は去年公園デビューは済ませてある。

その時友達になつたのが——

「おーい貴明、来たのか」

この男の子、向坂雄一だ。

「いやー助かった、俺ひとりじゃ姉貴を抑えきれなくてよ。ん？」

雄一は僕の陰に隠れているこのみちやんに気づいた様だ。

「誰だ？」のちに「」の

「この子はうちの隣の子ですね。こちらのみちゃん、自己紹介は？」

セリフの間にさかせん話を続けると、おじいちゃんがまたまた笑った。

そが、俺は向坂雄一、なんじぐな

卷之二

これで公園デビューは成功も同然だな。

なんたつてここ

「あら、タカ坊に雄一、私のいな」ところで盛り上がりがつていいんじゃないの」

向坂環ことタマ姉なんだから。

その後、タマ姉にもこのみちゃんを紹介したらびっくりやら氣に入られたらしく、今は女の子数人と一緒に遊んでいる。

「最近公園に来ないと思つたら、あの子と遊んでたのか」

「ああ、JYのみちゃんのお母さんに頼まれてね」

と言しながら公園内にあるベンチに田を向ける。

そこでは春夏秋冬と他の子たちの母親がおしゃべりしていた。

「ほほう、あの見慣れない美人のひとがあるのぢがつ」のお母さんか

「そ、柚原春夏さん。料理がとっても上手なんだ」

「いつの時代ですか？」

「つーん、同じくらい。和食なら向坂のおせんだけど、洋食なら春夏さんの方が上かな」

まじでか、と驚く雄一。

向坂家の味は何回かお呼ばれした時に食べたけど、かなりのレベルだった。

それを一部とせこえ越えてこる春夏さんせ、やつぱつわいこのだと改めて思った。

「男」「人でなに話してゐの?」

こつ之間にかタマ姉とのみちやんが女子達から離れてしゃりへ来ていた。

「向坂家と柚原家のどちらの料理が美味しいかにつけて

「あら、それとつても興味があるわね。どうが上なの?」

タマ姉の目に剣番けんばんな光が弾びる。

「それが引き分け。和食なら向坂家の方が上だけどね

「そつ、それならあいいわ。それにしてやるのみのおやつも中々やるわね

「つーん、おかあさんの『はんとつともおこつてのー』

「そつ、それは凄いわね

と、*「*の₁みに對して優しげな笑顔を向ける。

基本的にタマ姉は年下の子には優しい。

弟の雄一₁やなぜか僕にはその限りじゃないけど。

僕は本来の河野貴明じゃないからタマ姉も特別氣に入ることはないと思つたんだけど、どうやらタマ姉は僕に好意を持つてゐる様だ。とはいへ、まだまだ子どもだからとの好意をひもつとした意地悪としてしか表現できないみたい。

『タマ姉』という呼称もその一環のよう₁で、最初に環ちゃん₁と呼んだら不機嫌そうな顔をしてタマ姉と呼ぶように強要してきた。

まあこれは年下にちやん付けで呼ばれたのが面白くなかっただけかもしれないけど。

「なあなあ、そんないつも早く遊びま₁うか。*「*の₁みちやんは何して遊びたい?」

「えつとね、おまま₁いとー」

結局このあと、*「*の₁みちやん得意のリアルおまま₁いとを何故かタマ姉が気に入り、時間になるまで僕は不倫した夫の役をやらされた。

05話 水族館（前書き）

今回は私でもよくわからない話になってしまいます。
ご了承ください。

05話 水族館

TOHeart2のヒロインたちの数人は家庭などにかしらに問題を抱えている。

それは彼らが自力で乗り越えたり、将来の河野貴明の干渉によつて解決するものであり、決して幼少期に解決するものではない。

だから田の前で泣いているクリーム色の髪の少女を——久寿川ささらを助けるわけにはいかないんだ。

五歳になつた僕は誕生日に水族館に連れて行つてもらつた。

理由は二つある。

一つはゲームの「トレーニングコースでよく登場するところだから。

どんな場所が把握しておるのは決してマイナスではないだりつと思つたのだ。

……まあ、純粋に楽しみにしていたところもあるのだが。

そしてもう一つは彼女、久寿川をいつに会えるかと思ったからだ。

もちろん普通なら一回行った程度では、いくら彼女が水族館が好きでも出来ることは不可能だろう。

ここで僕の能力の登場である。

最近また使つてなかつたが、こういう時にこそ有効活用しなくては。

願いは『久寿川をいつに会えるか』、対価は適当に病氣か怪我でいいが。

ということで、能力発動！ とかはしなくていいんだけど何となくノリで。

「お父さん、僕両生類が見たい」

といつわけで彼女がいそな両生類コーナーに来る事を断固拒否して今は別

ちなみにお母さんこのコーナーに来る事を断固拒否して今は別行動をしている。

「せりた」の周辺なら自由に行動していいこと。いつお父さんのお言葉に甘えて、現在一人で探索中である。

「見つけた」

何故か意外と広い両生類コーナーの中のサンショウウオの水槽の前に、前世ではあり得ないクリーム色の髪の女の子がいた。

でも、

「どうして、泣いてるんだ？」

彼女はサンショウウオを見ながらも、その瞳から涙を流していた。

「どうして泣いてるんだ？」

今度は独り言ではなく質問として声をかける。

「え？」

「いや、どうしたのかなと思う」

嘘。

彼女があんなに悲しげに泣く理由なんて分かり切っている。

原作知識という反則技ではあるけれど、僕は彼女の事情を知っている。

「お父さんとお母さんが喧嘩して、私、どうしたらいいか分からなくて……」

「ここまで逃げて來たと」

「う、うん」

もし彼女の両親の喧嘩を止め、不和を解消するのなら簡単だ。

僕の能力を使えばいい。

対価はそれなりにかかるだらうけど、多分なんとかなる。

でも、ここでそれをしてしまつ事によって出来てしまつ影響が、
僕は怖い。

バタフライエフェクトによつて未来が大きく変わつてしまつこと
が、その責任が僕にのしかかるのが、怖いんだ。

だから、僕は彼女を助けるわけにはいかないんだ。
だけどさ。

それでも僕は彼女を助けたいと思つた。

それでも僕は彼女に幸せになつて欲しいと思つた。

この先にある確定した不幸に遭つてほしくないんだ。

だから、

「大丈夫だよ。きっと君の両親は喧嘩なんてやめて君を探してるのは
すだよ」

「やうかな

「やうだよ。だつてほら」

僕が指差す両生類コーナーの入り口あたりで、一組の男女が誰か
を探しているような仕草をしている。

「お父さんー、お母さんー！」

二人の元へかけていく彼女。

「願いは『久寿川家の不和の解消』、対価は『河野家の不和』かな。
あーあ、やつちやつた」

これでこの物語は一部ではあるが本筋から外れるだらう。

でも、それでもいいんじゃないかと今は思つ。

だつて僕は生きているから。

物語の『河野貴明』を演じるなんてまつぱらだ。

「とりあえず、喧嘩でもしているだらう両親を諫めにいくか」

あの後。

両親と会流して落ち着いたさとうちゃんと互いに自己紹介をして別れた。

さとうちゃんは「貴明さん……」とか呟いて、これがフラグなのかなあとと思いました。

あらかじめ決めておいた集合場所に行つてみると、うちの両親が口喧嘩してました。

「まあまあ、一人とも落ち着いて。場所を考えようよ」

はつ、と我に返る一人だが周囲からの視線は集めたままだった。

その場からすぐに離れ、結局そのまま帰ることになった。

帰りの道中も一人はイラついてるようすで、ほとんど何も話さず家に着いた。

「つてなことがあつたんだよ」

「それでおじさんもおばさんも元気がなかつたのでありますか」

「それでタカ坊、そのせからかやんはどんな子だつたの？」

「いだだだだつ！ 怒るのは結構だか俺にハつ当たりするのはつて割れる割れる割れるうー！」

数日後の公園。

いつもの三人にこの間の水族館でのことを能力のこと以外話してみた。

あれ以来、うちの両親の間ではいまだに冷戦状態が続いていてどうにかできないかと三人に相談してみた次第である。

「そもそも喧嘩の原因は何なの？ それが分かれば解決するかもしれないわ」

「せうだぜ貴明。お前『喧嘩をしていた』とは言つたが喧嘩の原因は言つてないよな

「それがしょもない原因でさ、『両生類はキモ可愛いかどうか』だとさ」

「…………それでどうしてこんな喧嘩になるのか不思議ね

まあそれは能力の対価のせいなんだけじね。

「つょつせこるこつてなに?」

「それはねこのみちゃん、カエルとかのことだよ」

「カエルさんは可愛いあります!」

「私は可愛いとまでは思えないけど嫌いじゃないわよ」

「本当かあー? 実は苦手とかつていだだだつ! 嘘ですか姉様
つー!」

「まつたく、この子は一言多いんだから。でもそうね、カエルが嫌
いかどうか確かめるために今日は河原に行きましょつか」

「賛成であります」

と言つわけで河原に来たのだが、カエルどこのの騒ぎではなくな
つてしまっています。

「タマお姉ちやーん!」

「おー姉貴つ、いいから戻つてこー!」

現在タマ姉は川に浮いているダンボールの中の子犬を救出すべく泳いでいる。

僕はそんな過去話あつたなあと、パニッシュが一周して逆に落ち着いています。

「雄一、このみちゃんを抑えてろよ」

「は?」

返事を聞く前に僕も川へ入水する。

「願いは『一人と一匹の無事』、対価はこの前のと合わせて酷い風邪にしておこうか」

泳いでタマ姉と子犬のところまで到着。

そう言えばタマ姉大嫌いだったよなと思い出させるほど彼女の顔は蒼白で、溺れる寸前のようだった。

無事なのが確定しているので、慌てずゆっくりとタマ姉を引っ張つて川岸を目指す。

「無事か、姉貴! 貴明!」

「ああ、大丈夫だよ。それより子犬は大丈夫? タマ姉」

「え、ええ、大丈夫みたいよ」

「ワンー」

子犬は思つていたよりも元気そうで、助かったと分かるとそこら辺をこのみちゃんと一緒に走り回つていた。

「ありがとうタカ坊、助かったわ」

「どういたしまして。一個貸しだね」

「ふふ、そうね」

ずぶ濡れで帰つたら怒られ、翌日高熱が出ました。

07話 小学校（前書き）

内容薄いです。

ざわづく教室の中、僕は小さく溜息をついた。

「まさかもう一度小学校に通うことになるなんてなあ

ところがで、小学生になりました。

それでも五月蠅いね、小学生低学年って。

さつきは『ざわづく』とか表現したけど、実際は動物園かと思つ
ほどキーキーキャーキャーと阿鼻叫喚な感じだよ。

オマケに担任の先生は新任らしく、五月蠅い児童を抑えられない
でいる。

家庭の事情で最近ストレスマッハな僕としては耐えられないね。

ところがで、

ダンッ！

机を大きく叩いて注目を集める。

「五月蠅い」

シンとした教室に僕の声が響く。

「さっきからギヤーギヤーと五月蠅いんだよガキ共が。ああ、先生
にお返事してくださいね」「さういふやつだ

その後、大きい声を出すとまた僕に怒られると思ったのか、ほと
んどの子が小さな返事を返していた。

「さっきの、やり過ぎじゃねえのか」

授業が終わり10分休憩に入ると、前の席の雄一が話しかけてき

た。

「ちよつと最近イラつつくことが多いってね。クラスの皆には悪い事をしたよ」

「なんだ、まだおばさんたち仲直りしていないのか?」

そう、久寿川家の不和を河野家に移したせいで、両親は未だに冷戦状態を続けている。

これは離婚するのも時間の問題かもね。

「原因はしようもないことだつたけど、お互に引くに引けないところまで来ちゃつていいから。」

「雄一、そろそろ次の授業が始まるぞ。前向けよ」

「ああ、分かった」

午前の授業を終えて昼休みになつた。

雄一は他の男子たちと一緒にどこかへ遊びに行つた。

僕も一応誘われたけど、他の子たちが怖がると悪いから辞退した。

「にしても暇だな。これは怖がられるの覚悟で雄一について行ったほうがよかつたかもな」

早くも後悔するが、今から行くのもなんだしな。

「……図書室にでも行くか」

教室に残っていた数人の児童に怖がられながら、僕は図書室へ向かつた。

「まさか小学校の図書室にこんなものがあるとはな。図書の先生も分かっている」

なんどこの図書室には西尾維新の戯言シリーズが存在していた。

内容的に明らかに小学生向きではないため、図書室の奥の方に置いていたようだが……これは読むしかないだろ。

結局、途中まで読んだクビキリサイクルを借りることにしたのだが、カウンターで図書の先生からストップがかかり、借りることができなかつた。

「1年生にはまだ早い」だとさ。

確かにその通りだが、精神的には20歳越えしている僕にはそれくらいが一度いいんだよな。

もちろんそんな事は言えないのでも、しょうがなく諦める事にした。

……借りる」とはできないけど読みに来ればいいからね。

そんな感じで小学校最初の日は終わつた。

1年が経ち、僕のクラスでの位置づけは『怒らせると怖いけど普段は物静かなやつ』となつた。

そのため、友人と呼べるのは雄一の他のはクラスに数人程度しかいない。

まあ、小学校の頃は割と誰とでも友達みたいな感覚だから僕が思つていてるより多いかも知れないけどね。

そうそう、今年からこのみちゃんも小学生になり、一緒に登校している。

春夏さん曰く「タカくんなら安心してこのみを預けられるわ」とのことだ。

そんなこんなで僕としてはそこそこ充実した生活を送っている時に、

タマ姉が九条院に転校することが決まった。

「河野貴明さんへ。放課後、学校近くの神社で待っています。差出人の名前は無し、と」

人生で初めてのラブレターらしきものを貰いました。

雄一と一緒に帰ろうと下駄箱を開けたらこの手紙が入っていた。

雄一は手紙を見ると「ヤーヤー」としながら「じゃあ俺は先に帰るとするわ」と言って走り去っていった。

「どうしたもんかね」

とは言つてもすることは決まつている。

神社に行つて誰だかわからない女子を振るだけだ。

小学生に告られてもなあ。

などと考へて、いりつちに神社に繋がる階段を登り切つていた。

神社前にいる女子は——タマ姉だった。

「遅いわよ、タカ坊。女の子を待たせるなんでまだまだね」

「そりやすまなかつた。これでも急いで来たつもりなんだけどな」

「まあいいわ。…………それでね、タカ坊。私、九条院に行くことになつたじゃない？ しばらく余えなくなるの。だから今のうちに言っておきたいことがあるの」

「…………なに？」

「私ね、

タカ坊のことが、好きなの」

「…………僕もタマ姉のこと好きだよ」

「違う。タカ坊の好きと私の好きは違うの。だから同じ好きになるためのおまじない」

そう言ってタマ姉は僕の頭を両手でそつと挟む。

タマ姉の顔が徐々に近づいてくる。

そして——唇が重なるだけのキスをした。

「待つててね、タカ坊。きっとやつちから『好き』って言わせてみせるから」

そう言い残してタマ姉は帰つて行つた。

「はあ、まさか手紙の主がタマ姉だったとはな。確かに綺麗な字で上級生だとは思つたけど」

だから雄一はニヤニヤしてたのか。

それにしても、この頃のタマ姉に告白されるなんて思つてもみなかつた。

しかもキスまでされたし。

……唇、柔らかかったな。

「じゃなくて、これもやつぱり僕の影響なのかねえ」

原作には「んなシーンはなかつたはずだし。

能力を使わなくとも、僕といつ存在はこの世界に影響を及ぼす。

「どうせ影響が出るのなら、好きな様にやつてみよう。できる範囲
だけでも知つてこらからこそできることをやつてみよう。

この世界に影響を及ぼすことがどれだけ危ういことか、この頃の僕
はまだ分かつていなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9810z/>

メイドロボのいる世界

2012年1月14日15時53分発行